

二〇二四年三月一日

踏青子盲導犬と語りつつ
手水舎に神の山より春の水
お披露目す商家の縁に享保雛
春愁や硯の海のすぐかわき
播磨灘見渡す限り春霞
春の鴨あそぶ汽水の夕波に
下萌を促す今朝の雨静か

みきお
千鶴
智恵子
明日香
わかば
きよえ
満天

二〇二四年二月二十九日

寝てる間に終はる散髪春うらら
啓蟄や始歩の病棟幾まはり
お前もか眠れぬ夜の浮かれ猫
捨てられぬ文語の聖書春の塵
通勤の電車朝寝の人ばかり
まなぶたの一重艶めく古雛
たらちねの雛も白寿を越えにけり
無縁塚へ人幅の道青き踏む
囀に議論のなごむ会議かな
と見る間に緑変したる若布かな
烟るごと蒼天覆ふ花ミモザ

康子
やよい
もとこ
むべ
山椒
澄子
ぼんこ
なつき
むべ
かえる
わかば

二〇二四年二月二十八日

テーブルに書類散乱納税期
春月に濡るるやに見ゆ森の木々
春雨の音に二度寝を許しけり
背伸びするごとくに鴨の羽ばたきぬ
春泥に立ち往生や三輪車

せいじ
むべ
素秀
はく子
康子

春寒し病床六尺読みてより
桜鯛海にほり投げ島びらき
春光や目鼻薄れしなでぼとけ
花堤ほとりに小さき釈迦御堂

もとこ
千鶴
かえる
はく子

二〇二四年二月二十七日

胎撫せて座せる妊婦へ春の風
強東風にしぶきを飛ばす水車かな
鳴き交はす声を残して鳥帰る
白き肩並ぶひと畝大根畑
検温のうつつに覚むる春の夢

かえる
康子
あひる
みきえ
素秀

二〇二四年二月二十六日

梅寒し幟並べど人まばら
撫で牛の鼻面ぬくし梅日和
リハビリの杖を友とし青き踏む

千鶴
なつき
みきお

二〇二四年二月二十五日

洗濯物とりこみ気づく朧月
磴半ば寺門の梅の匂ひけり
ホール出て春雨傘の華やぎぬ
人力車春の浅草ひと巡り

せいじ
康子
むべ
山椒

二〇二四年二月二十四日

春野菜躍り畦ゆく猫車
風花を呑み込むごとく露天の湯
鳴帰り川面を占むる雲の翳

智恵子
かえる
明日香

毎日句会みのる選・二〇二四年三月三日